

中嶋 嶺雄さん(中国学者)

なかしま・みねお 中国学者。1936(昭和11)年5月11日松本市生まれ。東大大学院修了。社会学博士。95年から東京外国語大学教授。主な著書に「現代中国論」、「香港 移りゆく

都市国家」、李登輝氏との共著「アジアの知略」など。評論集「北京烈烈」でサントリー学芸賞。「アジア・オープン・フォーラム」世話人代表。

「日本と台湾の有識者が話し合う『アジア・オープン・フォーラム』をなぜやるようになったか」と言うのと、一つは李登輝さん(台湾の前総統)との約束があるんです。一九八五年に李さんと最初にお会いした時以来、これまでの国民党と自民党政治家のような利権に結びつきがちな付き合いが、透明性の高い知的な交流が必要だと一致したんです。もう一つは、台湾は貿易や文化交流のパートナーとして非常に重要であるのに、国交がないために関係が遮断されてきました。こういう空白のままでもいいのかというのが、当時の気持ちでした。」



「『フォーラム』は先に松本市で開かれた会議を最後に歴史的使命を終えたが、中嶋さんが招請した李氏の訪日は実現しなかつた。」

「日本は対中国外交において主体性を失っていると思います。李さんは今や市民なんだから、日本は訪日を拒否する理由が見つかりませんと言えは済んだはず。中国側はいろいろ批判するかもしれないが、それ以上のことはできなかったと思います。政治家が責任を持って決断すればよかったのに、そうはならなかった。そこには台湾問題や李さんの訪日問題に触れると、ヒビッと感電でもしたかよつにリアクションを起こす日本の体質がありますね。」

ね。マスコミを含め世論は、李さんの訪日は当然だとい

う声が強くなっており、近い将来実現するのではない

ときを語る

【アジア・オープン・フォーラム】1989年、第1回会議を台北市で開いたあと、日本と台湾で毎年交互に開催。参加者は学者のほか政治家、財界人など広範囲に及び、日台関係の新しい人脈構築に貢献した。李前総統の退場に伴い最終回となった松本会議の全体テーマは「21世紀のアジアの知的戦略」。「フォーラム」の後を継ぐ日台間の定期的な交流パイプづくりが課題。

台湾の民主化

かと僕は見えています。ただ、あれも病氣療養とか、単なる観光旅行では意味がないんです。」

「現代中国の研究者の立場から、台湾の民主化を検証、分析してきた。」

「台湾の民主化は、中国大陸の方が天安門事件で歴史的悲劇のつまずきを刻んでしまっただけに、それとの対比はあまりにも鮮やかだったと言っているんですよ。それは単なる選挙制度の改正などで済まない、国民党的体質、あるいは中華王朝のような体質の改革にありました。社会主義になった中国では毛沢東王朝で



「李さんはまた、野党(民主進歩党)から総統が出られるシステムをつくり、初の民主的な政権交代を可能にした。」



アルペンスキーのW杯女子大回転第6戦を制し、21世紀に最高のスタートを切ったソニヤ・ネフ(AP=共同)

W杯アルペンのソニヤ・ネフ

不運に泣かされてきたスノボイの女子選手が二十一世紀の最高スタートを切った。アルペンスキーのワールドカップ(W杯)女子は六日のマリボル(スロベニア)での大回転第6戦で新世紀初のレースを行い、ソニヤ・ネフ(ロシア)が優勝、大回転3連勝を飾った。十一月の第2戦と合わせて、これで大回転4勝。初の種目別タイトル獲得へ大きく前進した。

「大回転の女王」へ前進
不運の苦勞人 今季3連勝
マリボルは因縁の地でこそ、だった。一回目の2回目は、順位を二十一日の目別タイトル獲得へ大きく前進した。ネフは一九九三年シズ六年、W杯で初めて表彰台に立ったが、その中央はドライバルを制し、思わず涙を流したが、ロイター電のスター、サイツィンゼッケンにキスした。だが「そのことは考えた



日本との交流 民間からオープンに

にしました。これは五千年の中華世界が始まって以来、初めての「こと」です。」

「中国当局は李氏を『隠れ独立派』と見なし、陳水扁政権に対しても独立への警戒を緩めていない。」

「大陸の体質が中華思想だから、台湾の人たちの心のひだとか、台湾人意識の形成を理解しようとしてもいない。大陸にとって自分(北京)は『チャイニーズ・ワールド・オーダー(華夷秩序)』の中心で、その周辺は自分に従わねばならないという意識がある。だから、ちょっとでもはみだしていけば、分裂主義とか統一を乱すものとして反逆者のらく印を押す。ここに中国の基本的な問題点があります。将来、(台湾を含めた)ある種の緩やかな連邦制でもいいし、そういう時代になることが中国にとっても重要になるでしょう。」



「日本は中国と国交を樹立しているから、台湾との間では政治・外交面でオフイシャルなことはできません。ですが、民間レベルの交流は可能だし、現に東京外大が進めている国立台湾大学との交流など、いろいろな分野でオープンに交流すべきでしょう。それは決して大陸を敵視するとか、大陸との交流を閉ざすことではないのです。」

(聞き手・坂井臣之助、写真・小島健一郎)